

修理工程

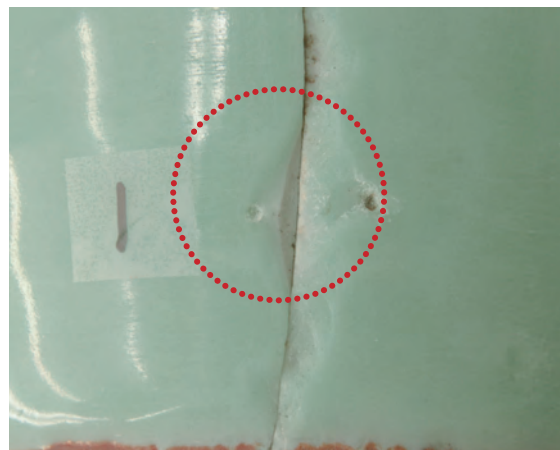
旧修理で塗られた塗料の除去

剥離剤を用いて塗料を除去。広範囲にわたって施されていたことがよくわかります。

広く塗ってしまって元の色がわからなくなってしまったのね。



解体



接合箇所を解体し、破片ごとにクリーニングをします。修理前は、「青磁輪花碗 銘馬蝗絆（ばこうはん）」のように、鋲（かすがい）を用いた接合跡などがら所見つかりました。さらに、接合部は破損時に生じた段差を解消するために、表面を削って整えられていたことがわかりました。



青磁輪花碗 銘馬蝗絆(重要文化財 三井高次氏寄贈 TG-2354) 鋲が見られる作品例

ホチキスでとめてみたいだほ～



青磁鳳凰耳瓶

せいじほうおうみみへい 【TG-2329】

南宋～元時代・13世紀 陶製
高さ 31.5cm、口径 11.7cm
底径 10.7cm
松永安左工門氏寄贈
修理 蘭山隆司

頸の左右に鳳凰を象った耳をもち、全体に粉青色の青磁釉が厚くなめらかにかけられた瓶。中国浙江省西南部の龍泉窯（りゅうせんよう）において南宋時代から元時代にかけて生産された、いわゆる砧青磁（きぬたせいじ）の代表作です。同様の青磁瓶は花器として日本でも珍重され、国宝「青磁鳳凰耳花生 銘万声」（和泉市久保物記念美術館蔵）をはじめ、伝世（でんせい）の名品がいくつも知られています。本作品は、茶道具を中心とした蒐集家として名高い松永安左工門氏からの寄贈品です。

修理前



接合した箇所や削って整えた表面の傷を隠すように口縁から胴にわたる広範囲に施された塗料は、経年により劣化して変色し、鑑賞の妨げとなっていました。

修理後



合成樹脂を用いて再び接合し、欠失部の補填、補彩は最小限にしました。作品本来の肌が現れ、微妙な色合いを鑑賞することができるようになりました。



本来の美しい色が戻ったのね。

関連事業

最新情報はウェブサイトで <http://www.tnm.jp/>

●列品解説

1「東京国立博物館コレクションの保存と修理」

日時：3月4日(火) 14:00～14:30

場所：平成館企画展示室

講師：土屋裕子(保存修復室長)

特集陳列「東京国立博物館コレクションの保存と修理」のまどころ、当館で日々行なっている保存と修理の活動をご紹介します。

2「東洋書画の修復と保存」

日時：3月11日(火) 14:00～14:30

場所：東洋館TNM & TOPPANミュージアムシアター

講師：鈴木晴彦(保存修復課アソシエイトフェロー)

掛軸や巻物に用いられる修復技術、展示や保管の工夫について様々な実例を交えながら解説します。

3「展示を支える修復技術－マウント、書見台、保存箱」

日時：3月25日(火) 14:00～14:30

場所：東洋館TNM & TOPPANミュージアムシアター

講師：米倉乙世(保存修復課アソシエイトフェロー)

作品の魅力を最大限引き出しつつ、安全性の高い展示を実現するための工夫について解説します。

東京国立博物館 コレクションの 保存と修理

平成26年3月4日(火)～3月30日(日) 平成館1階企画展示室

本特集陳列は今年で14回目を迎えました。このリーフレットでは、今回展示する作品の中から「雑色変り瑩花文錦」「観音三十三応身図」「壺鍍残欠」「青磁鳳凰耳瓶」の4件をご紹介します。染織、考古、絵画、陶磁各分野の作品の材質や構造、修理前の状態による修理方針や工程の違い、また修理の過程で判明した情報などとともに修理後の作品をご鑑賞ください。

雑色変り瑩花文錦

ざっしょくかわりいしだみはなもんにしき 【I-336-61】

奈良時代・8世紀 絹製、錦
本体 11.6cm×10.7cm
中性紙マツ 40.0cm×30.0cm
修理 当館特任研究員 澤田むつ代、
同保存修復課アソシエイトフェロー
鈴木晴彦・米倉乙世・沖本明子

明治11(1878)年に法隆寺から皇室へ献納された法隆寺献納宝物の一つで、複雑綾組織経錦(たてにしき)を用いて瑩文をあらわした残欠です。一方は小瑩文、他方は並び三菱風の花文と丸みを帯びた花文のような文様を互の目に配した経錦です。

修理前



作品を挟んだガラス内面に結晶や斑点状、線状など乳白色のくもりが著しく発生し、鑑賞や保存上の妨げとなっていました。裂(きれ)そのものも亀裂が多く、脆弱な状態でした。

修理工程

糸目揃え(参考)



ガラスから外し、水をつけた筆とピンセットで糸目を揃えながら文様の歪みを修正します。

裏打ち(参考)



楮紙(こうぞし)を用いて裏面より小麦粉澱粉糊で裏打ちし、補強します。錦は表裏の組織が異なるので、裏面が見えるように1cm四方の窓をあけました。

修理後



中性紙でウィンドウマツ装に仕立てました。文様の歪みが整えられ、裏打ちによって織組織の状態も安定し、安全な状態で展示・保管ができるようになりました。



編集・発行:東京国立博物館 制作:DNPアートコミュニケーションズ
*ここに掲載した写真は修理施工者よりご提供いただいたものも含まれます。

観音三十三応身図

かんのんさんじゅうさんおうじんず [A-110]

室町時代・15世紀	絹本着色
本紙	修理前 129.0cm×185.1cm
	修理後 130.2cm×186.2cm
表具	修理前 222.5cm×197.0cm
	修理後 248.7cm×210.7cm
修理	株式会社 文化財保存

修理前



本紙(ほんし)には本来の図様を塗り潰すほどの厚塗りのオーバーペイント(以前の修理時にほどこされたもの)が見られました。料絹(りょうけん)の硬化による横折れ、絵具層の剝落などが、表具には汚れ、折れ、繊維の粉状化などがあり、鑑賞上、保存上ともに大きな支障となっていました。

壺鐙残欠

つぼあぶみざんけつ [J-4922]

古墳時代・6～7世紀	鉄製(模造部分は樹脂製)
山梨県甲府市中道町出土	
修理前	①(壺・鐙靱部分) 現存高13.3cm、現存幅14.3cm、全長13.0cm
	②(鐙靱部分) 長23.5cm
修理後	①(壺・鐙靱部分) 高16.5cm、幅14.8cm、全長14.8cm
	②(鐙靱部分) 長24.0cm
修理	株式会社 京都科学

修理前



①壺・鐙靱部分



②鐙靱部分

古墳時代の典型的な半球状鳩胸部をもつ鉄製壺鐙です。壺部分はシンプルな一枚造りで、中軸に稜線があります。柄部は下部で二股に分かれて柳端(やないば)部が壺部分の後端に巻きついていきます。踏込部は残念ながら欠失しているためありません。柄部上端には、方形の鐙靱(みずお)孔をもっています。鐙靱部分は兵庫鎖(ひょうごくさり)2個と鉸具(かこ)から構成されています。松平定信編『集古十種』(1800年頃)に収載された学史上著名な資料で、江戸時代の保存状態を確認できる稀有な例です。

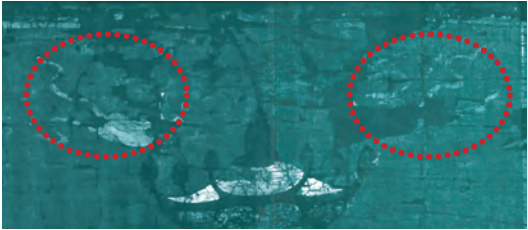
①は劣化・変形が激しい上、錆化(しゅうか)も進み展示ができませんでした。壺部分上方・杵金外反と兵庫鎖の破断および鉸具刺金の変形が著しい状態です。

②も①同様に劣化・錆化が進行し、展示できない状態でした。

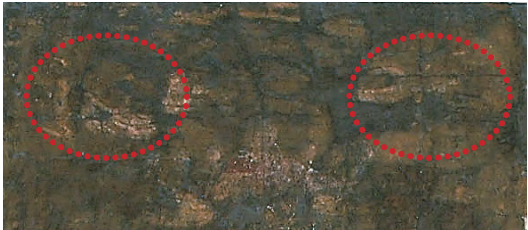
画面を3つの区画に分け、中央に十一面観音菩薩立像を、左右には『妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五』に基づき、観音が人々を救うために現わす32の化身の姿を描いています。多方面の靈驗利益を期待する観音信仰のあり方を反映した図様です。

事前調査と施工 X線撮影

修理するにあたり、表面から見ただけではわからない損傷状況などを調査します。



中央の観音頭上の天蓋(てんがい)のX線画像。天蓋の上部左右に、表面からは見えないリボン状の飾りがあるのがわかります。



本紙のすぐ裏に貼ってあった補強の紙(肌裏)を取ったところ。X線画像で見えたとおり、リボン状の彩色(裏彩色)がされているのが確認できました。この部分がオーバーペイントで図が潰されてしまっていた部分であることが明らかになりました。(写真:作品裏面)

人工劣化絹

絵画(絹本)の欠失部を絹で補修することを補絹(きりぬ)といいます。新しい絹をそのまま使うと経年劣化で弱ったオリジナルの絹と強度や伸縮性の差が生じ、そこから新たな損傷が生まれる危険があります。そのため、オリジナルの絹と同じ組織で織った絹を電子線や紫外線で人工的に劣化させたものを用います。



欠矢部の形に切った劣化絹を絹目や形を崩さないようにうめていきます。(写真:観音の頭部付近)

修理後

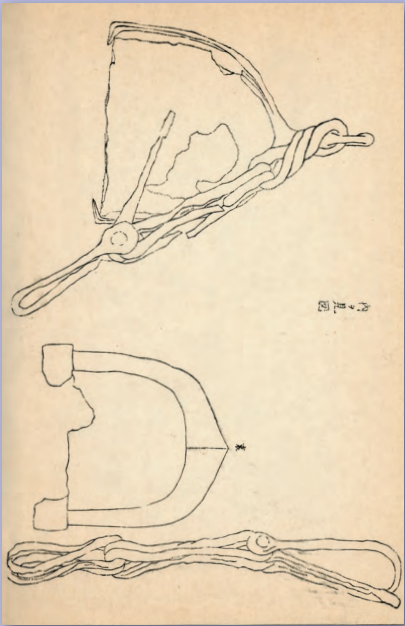
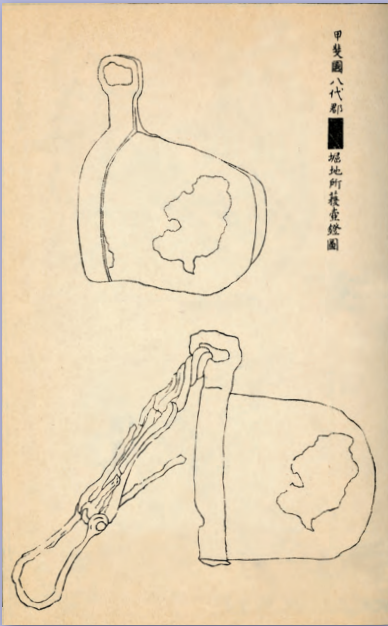


料絹の浮きや折れが緩和され、オリジナルを損なっていた旧補絹も可能な範囲で除去し、表具の裂(きれ)も本紙の大きさとバランスや色調を考慮したものに新調したので、修理前に生じていた問題が解消されました。

事前調査と施工

200年以上前の状態がリアルに記録されているなんて、すごいね。

『集古十種』収載時の保存状態と比べることで、それ以降の外力による変形・劣化を想定することができます。さらに、X線透過撮影などの調査によって、現状の保存状態で錆化の進行が少ない箇所では、鉄そのものの弾性がまだ残っていることが想定されたため、押し(倣い)型を使って少しずつ当初の形に近づける矯正作業を行いました。



『集古十種』国書刊行会 1908年版 より

②の修理・模造後

修理部分

①の修理後

模造部分

江戸時代の記録からわかる変形・劣化の履歴と、事前調査による復原図をもとに、②の模造部分はオリジナルの鐙靱部分を着脱できるように工夫して、製作当初の本来の姿を再現する修理方針を立てた事例です。このような十分な事前調査と修理計画によって、さらに欠失していたもう片方の壺鐙の模造品を作成することで、オリジナル部分の保存修理と旧形態の回復を実現するとともに、鐙本来の一揃いの姿も再現することができました。

